中英語の発音

作成日: 2013 年 1 月 15 日
最終更新日: 2013 年 3 月 17 日
合唱団 宙の木 副代表 浦 公統
E-mail: kimitsuna@mail-box.jp

1 はじめに

Benjamin Britten 作曲の "A Ceremony of Carols" の中には、14 世紀～15 世紀に書かれた、「中英語 (Middle English)」と呼ばれる、現代英語の祖先に当たる言語の詩が多数あります。これら中英語の詩は、現代英語の発音では読めません。

イングランドでは、14 世紀半ばから 17 世紀初めにかけて、長母音の発音がガラリと変わる、「大母音推移 (Great Vowel Shift)」が起こりました。そのため、中英語は現代英語と全く発音が異なります。

また、大母音推移の時代、英語の発音が急激に変化していく中で、他方、活版印刷の発達に伴い、綴り(スペル)の方は、15 世紀半ば頃から段々と固定されていきました。このことが、現代英語の発音が、アルファベットそのままのローマ字読みと乖離している原因です。

そのため、スペルが固定される以前の 15 世紀半ばまでに書かれた英語は、原則として、アルファベットそのままのローマ字読みで発音し、それ以降の時代に書かれた英語は、私たちが学校で習っている、現代英語のような発音になります。大まかにまとめると、

15 世紀半ば (1450 年頃) 以前 ⇒ ローマ字読み
15 世紀半ば (1450 年頃) 以降 ⇒ 現代英語読み

です。

中英語は、現代英語よりずっと純粋な言葉です。新鮮な、「ありのままの気持ちで」発音してください。

2 中英語の読み方

2.1 原則

① ローマ字読みです。

- "name" は「ネイム」ではなく「ナーメ[naːmə]」です。
- "he" は「ヒー」ではなく「へー[heː]」です (閉口母音なので「ヒ」に近い「へ」です)。
- "good" は「グッド」ではなく「ゴード[goːd]」です。
- "of" は「オヴ」ではなく「オフ[of]」です。

② 母音も子音も全部読みます。

- "one" は「ワン」ではなく「オーネ[oːnə]」です。
- "shephers" は「シェファーズ」ではなく「シェプヘルス[ʃephərs]」です。

③ ドイツ語読みに近いです。

- 母音＋子音 1 文字は長母音、母音＋子音 2 文字は短母音です。
- e は、強い短母音と長母音は概ね閉口母音、弱母音では曖昧母音です。
- 母音＋gh は、ドイツ語における母音＋ch (たとえば "ich", "doch") と同じような発音です。

2.2　注意すべき母音の読み方

①　母音＋a は、前の母音を開口母音にして、かつ長母音にします。

・ “ea” はドイツ語の ae (ä) に相当します。開口母音の「エー[ɛː]」です。

・ “oa” は現代英語の course, horse のような開口母音の「オー[ɔː]」です。

②　ou, ow の発音は 2 種類あり、通常は長母音の「ウー[uː]」です。この「ウー」はドイツ語の “du” のように深い母音で発音すべきです。ただし、現代英語で「オウ」と発音する単語の場合は、中英語でもそのまま「オウ[ou]」です。

・ “thou” は現代英語で「サウ」なので、中英語では「トゥー[θuː]」です。

・ “flour” は現代英語で「フラウワ」なので、中英語では「フルール[fluːr]」です。

・ “follow” は現代英語で「フォロウ(foll+オウ)」なので、中英語でも「フォロウ[folou]」です。

③　ew, eu の発音は 2 種類あり、開口母音の「エウ[ɛu]」と、閉口母音の「エウ[eu]」があります。

この発音の違いは、古英語（中英語の祖先。5 世紀半ば～12 世紀頃の言語）に由来します。見分け方は、古英語の綴りを調べるしかないようです。

ただ、どちらかと言えば、閉口母音の場合が多いようです。また、もし “eaw” あるいは “aew” と綴っていれば、開口母音で確定です。

・ “newe” は古英語 “niwe” から来ており、閉口母音の「ネウエ[neuə]」です。

・ “dew” は古英語 “dæw” から来ており、開口母音の「デウ[dɛu]」です。

なお、閉口母音の ew は、15 世紀に入るとさらに閉口化が進み、「イウ[iu]」と発音していたようですが、“A Ceremony of Carols” の中の 15 世紀の詩には、該当する単語はありません。

④　ai, ay は、中英語期に最も発音が活発に変化した綴りの一つです。

14 世紀までの中英語（Early Middle English）では、主に「エイ[ɛi]」と読んでいたようですが、大母音推移が始まる 1450 年頃の中英語末期（Late Middle English）には、一旦「アイ[ai]」に統一され、近代英語で再び閉口化し、現在の “say” のように、「エイ[ei]」になっていったようです。

したがって、詩が書かれた当時の発音にできる限り忠実であろうと徹底するならば、以下のようにするべきでしょう。

・ 14 世紀～15 世紀初頭に書かれたとされる詩（#2, #3, #4a, #5）では、「エイ[ɛi]」と発音する。

・ 15 世紀半ば以降に書かれたとされる中英語末期の詩（#9, #10）では、「アイ[ai]」と発音する。

⑤　単独の e は、強母音の場合は、長母音でも短母音でも、概ね閉口母音です。ただし、「e 1 文字＋r＋母音」の場合は開口母音になります。e が 2 文字続く場合は、r があっても閉口母音です。

・ well は閉口母音の「ウェル[wel]」です。

・ be は閉口母音の「ベー[beː]」です。

・ there は開口母音の「テーレ[θɛːrə]」です。

・ deer は閉口母音の「デール[deːr]」です。

⑥　語末の e について

・ 語末の e は、原則として曖昧母音[ə]ですが、発音しない場合もあります。

発音しないのは、見た目の飾りとして綴っている場合です。しかし、どの単語が発音するもので、どの単語が飾りなのかは、専門家でも意見が分かれているようです。

「原則として語末の e は曖昧母音として発音する。ただし、音符が割り当てられておらず、言いにくい場合には発音しない」ぐらいでいいでしょう。

- “hevenè” のように、アクセント記号が付いた è は、語末でも閉口母音の「エ[e]」です。
- “yongë” のような ë は、単に「この e は発音します」と明示しているだけで、普通の e と同じです。しかも、¨ は弱母音にしか付きません。したがって、ë はいつも曖昧母音[ə]です。

⑦ 長母音の u は発音変化して、ドイツ語の ü の発音になります。

- “vertu” は「ヴェルテュー[vertyː]」です。ただし、“There is no Rose” に出てくる “vertu” は、その次に続く “Jesu” を中英語読みで「ジェージュー[dʒeːzyː]」と読むと綺麗にならないので、ラテン語風に「イェスー[jɛsuː]」と読み、かつそれと韻を踏むために、「ヴェルトゥー[vertuː]」と発音することが多いようです。

⑧ 単独の a は、開口母音[æ]や二重母音、曖昧母音にはなりません。

- “carol” は「キャロル」ではなく「カーロル[kaːrol]」です。
- “was” は「ウォズ」ではなく「ワス[was]」です (例外的に短母音です)。

⑨ “to” は「トゥー」ではなく「トー[toː]」です。

2.3 注意すべき子音の読み方

① gh はドイツ語の ch に相当します。e, i の後では「ヒ[ç]」、a, o, u の後では「ホ[x]」です。

- “night” は「ニヒト[niçt]」です。
- “nought” は「ヌーホト[nuːxt]」です。

② r はどんな場合でも巻き舌で発音します。

- “for” は「フォル(巻き舌)[for]」です (例外的に短母音です)。
- “born” は「ボルン(巻き舌) [born]」です。

③ th は、語頭と語末では濁らず「ト[θ]」と発音し、語中で母音＋th＋母音の場合に限り、「ド[ð]」と濁ります (現代英語の th はサ行に近い音ですが、中英語では、舌を歯に少し強めに当て、タ行に近い感じで発音する方が読み易いようです。これは宙の木で私たちが詩を読みあったときの感想です)。また、語中では、“th” を 1 文字として扱います。

- “the” は、強調する場合は「テー[θeː]」、軽く発音する場合は「テ[θə]」です。
- “that” は「タト[θat]」です (例外的に短母音です)。
- “leaveth” は「レーヴェト [lɛːvəθ]」です。
- “another” は「アノーデル[anoːðər]」です (th は「1 文字」なので、直前の o は長母音)。
- “bothe” は語末の e を発音するなら「ボーデ[boːðə]」、発音しないなら「ボート[boːθ]」です。

④ s の清濁は th と同様で、語頭と語末では濁らず「ス[s]」と発音し、語中で母音＋s＋母音の場合に限り、「ズ[z]」と濁ります。

・ “persons” は「ペルソンス[persons]」です。
・ “aungels” は「アウンゲルス[aungəls]」です。
・ “is” は「イス[is]」、“was” は「ワス[was]」です（例外的に短母音です)。
・ “pleasure” は「プレーズル[plɛːzur(ə)]」です。
・ “rose” は語末の e を発音するなら「ローゼ[roːzə]」、発音しないなら「ロース[roːs]」です。

⑤ f の清濁も s や th と同様です。語頭と語末では濁らず「フ[f]」と発音し、語中で母音＋f＋母音の場合に限り、「ヴ[v]」と濁ります。
・ “of” は「オフ[of]」です。
・ “lefe” は語末の e を発音するなら「レーヴェ[leːvə]」、発音しないなら「レーフ[leːf]」です。

⑥ c について
・ c＋i, e, h 以外の場合は k と同じ発音です。“carol” は「カーロル[kaːrol]」です。
・ ch は現代英語と同じように、ch＋母音の場合は「チ[tʃ]」、ch＋子音あるいは末尾の ch の場合は「ク[k]」と発音します。
“child” は「チルド[tʃild]」です。“ich” は「イヒ[iç]」ではなく「イク[ik]」です。
・ c＋i, e の場合（“innocentes”, “circle” など）は、濁らない s の発音で良いようです。

⑦ ng は、語中でも語末でも、現代英語の “English” の発音のように、必ず g を明確に発音します。
・ “singing” は「シンギング[siŋgiŋg]」です。
・ “king of all kings” は「キンゴフ アル キングス[kiŋgof al kiŋgs]」です。

⑧ 母音＋h の h は発音します。母音＋gh とほぼ同じ扱いです（この h は “A Ceremony of Carols” には出てきません)。
・ “dohtor” は「ドウホトル[dɔ(u)xtor]」です。

⑨ wh の発音は現代英語と同じ [hw] ですが、h を略さずに発音してください。
・ “what” は「ホワト[hwat]」です（例外的に短母音です)。

3　まとめ

3.1　母音の読み方

綴りに (*) が付いた母音・単語は、“A Ceremony of Carols” には出てきません。

綴り	用法	発音	例	備考
a, aa(*)	長母音	「アー[aː]」	space, make, gan, vale	現代英語の cat や lady のような発音にならないこと。
a	短母音	「ア[a]」	alle, forma, candelmesse	
e, ee	長母音	e＋r＋母音： 開口母音の「エー[ɛː]」 上記以外： 閉口母音の「エー[eː]」	there, yere, fere hevenè, be, wesall, she, quene (※)	(※) “quene” は “kwene” と綴ることもできます (同じ発音・同じ意味)。
e	短母音	閉口母音の「エ[e]」	person, lesse	
e, ë	弱母音	曖昧母音の「エ[ə]」	alle, yongë	
è	-	閉口母音の「エ[e]」	hevenè, passèd	
i, y	長母音	「イー[iː]」	I, by, melody	
i, y	短母音	「イ[i]」	child, birth, first, nyght(*)	
o, oo	長母音	「オー[oː]」	rose, to, bothe, good	
o	短母音	「オ[o]」	wolcum, yongë, for	
u	短母音	「ウ[u]」	wolcum, such, lulled	
ea	-	開口母音の「エー[ɛː]」	heaven, earth, pleasure	
oa	-	開口母音の「オー[ɔː]」	hoarse	
ai, ay	-	14 世紀～15 世紀初頭： 「エイ[ɛi]」 15 世紀半ば以降： 「アイ[ai]」	day (#2), may (#3), maiden, lay, spray (#5) purvayance (※), always, praise (#9), lay (#10)	(※) “purvayance” はテキストによっては “purveyance” と綴っています。
ei, ey(*)	-	「エイ[ɛi]」	seintes, eyr(*)	
oi(*), oy	-	「オイ[oi]」	point(*), joy	
au, aw(*)	-	「アウ[au]」	aungels, drawe(*)	
eu(*), ew	通常	閉口母音の「エウ[eu]」	feule(*), newe	
ew	例外	開口母音の「エウ[ɛu]」	dew, fewe(*)	古英語で “æw” と綴るもの。
eaw(*)	-	「エウ[ɛu]」	deawes(*), feawe(*)	
ou, ow(*)	通常	「ウー[uː]」	thou, flour, bour, how(*)	
ou, ow	例外	「オウ[ou]」	thought, follow, four	現代英語で「オウ[ou]」と発音するもの。

3.2　長母音・短母音・曖昧母音の区別

①　長母音になる場合

・　強母音＋子音 1 文字（例：make, swete, yere, one, bothe (th は 1 文字と考える))

※　例外：次のような単語では短母音になります。

what, was, ye, it, is, in, his, for

・　語末の強母音（例：be, by, no, vertu）

②　短母音になる場合

・　母音＋子音 2 文字（例：alle, well, birdès, wolcum, such）

・　弱母音（例：Thomas, seintes, iwis, wolcum）

・　アクセント記号付きの è (例 : hevenè) (長母音化させて「エー[eː]」と読むこともあるようです)

③　曖昧母音になる場合

・　弱母音の e, ë (例：alle, yongë)

長母音か短母音かで迷ったら、音符抜きで詩をよく読んでください。だいたい判別できます。

3.3　注意すべき子音

綴りに (*) が付いた子音・単語は、“A Ceremony of Carols” には出てきません。

綴り	発音	例	備考
c	c＋i, e 以外：「ク[k]」 c＋i, e：「ス[s]」	candelmesse, came space, innocentes	
ch	ch＋母音：「チ[tʃ]」 ch＋子音 or 語末：「ク[k]」	child such, chricolyte(*)	
f	母音＋f＋母音：「ヴ[v]」 上記以外の f：「フ[f]」	lefe (e を発音する場合), efen(*) falleth, of	
gh	e, i＋gh：「ヒ[ç]」 a, o, u＋gh：「ホ[x]」	nightingalë nought	ドイツ語の ch に相当。
母音＋h(*)	母音＋gh と同じです。	dohtor(*)	
ng	g を明確に発音します。	king, sing, aungels	現代英語の “English” の発音。
r	巻き舌で発音します。	born, are, here, morning	
s	母音＋s＋母音：「ズ[z]」 上記以外の s：「ス[s]」	pleasure seintes, persons, is, as	
th	母音＋th＋母音：「ド[ð]」 上記以外の th：「ト[θ]」	another thou, there, this, the, earth, twelfthe,	
wh	現代英語と同じ[hw]です。 ただし、[h]は省略不可です。	what, whom, whoso	

4　おわりに

この資料の内容は、一つの基礎であり、指標に過ぎません。本当に正しい発音は、歌を歌うあなたが決めることです。

どうぞ、この資料の内容をまず一通り頭の片隅に置いて、音符抜きで、詩を何度も音読してください。

もし読み方に迷ったら、この資料に立ち返ってみてください。あるいは、参考文献などを自分で調べても良いと思います。そして、なんとなく少し分かったような気がしたら、とにかくもう一度詩を読んで、今度は音符のリズムを付けて歌ってみてください。

そして、何度も何度も詩を読んでいて、ふと心に沁みて、ふと納得したとき、それが本当の正しい発音です。その発音が正しいのかどうか、誰にも確認する必要はありません。他の誰かの発音に、無理に合わせる必要もありません。堂々と歌ってください。なぜなら、それが本当のあなたの声だからです。

5　参考文献

この資料を作成するにあたり、参考にした資料を挙げておきます。正確な発音を説明している資料はなかなか乏しく、この中で、国際音声記号を使って体系的に説明しているのは Wikipedia[5]ぐらいです。この Wikipedia の記事は University of Texas の言語学の大学院生が整理したもののようです。

以下のオンライン文献には、[10]は 2013 年 3 月 16 日、他は 2013 年 1 月 14 日にアクセスしました。

[1] Benjamin Britten, *A Ceremony of Carols：SATB & harp Arr. by Julius Harrison*, Boosey & Hawkes Music Publishers Ltd. (London), ISMN: 9790060014116.

[2] boychoirs.org (2002), Robert H. Rogers (1976), “Benjamin Britten A CEREMONY OF CAROLS (Opus 28) for treble voices and harp accompaniment.”, http://www.californiaboyschoir.org/britten003.html .

[3] Cynthia Turner Camp, “Pronouncing Middle English”, The University of Gerogia, http://cynthiacamp.english.uga.edu/index.php/resources-for-undergraduates/language-aids/67-pronouncing-middle-english .

[4] President & Fellows Harvard University, “Middle English Teaching Resources Online” (METRO), http://metro.fas.harvard.edu/icb/icb.do?keyword=k15189 .

[5] Wikipedia (en), “Middle English phonology”, http://en.wikipedia.org/wiki/Middle_English_phonology .

[6] David Will, “Middle English Pronunciation Guide”, Marshall University, http://webpages.marshall.edu/~will2/chaucer.html .

[7] Navilang.com, “Middle English Pronunciation (How to speak Middle English)”, http://www.nativlang.com/middle-english/middle-english-pronunciation.php .

[8] John Gardner, “The Pronunciation of Chaucer's Middle English”, University of California, http://www.english.ucsb.edu/faculty/oconnell/pronunciation.htm .

[9] Wikipedia (en), “Ë”, http://en.wikipedia.org/wiki/%C3%8B .

[10] Wikipedia (en), “é”, http://en.wiktionary.org/wiki/%C3%A9 .

[11] Wikipedia (en), “I syng of a mayden”, http://en.wikipedia.org/wiki/I_syng_of_a_mayden .

[12] A. L. Mayhew & Walter W. Skeat, “A Concise Dictionary of Middle English From A.D.1150 to 1580”, Oxford University Press, http://www.gutenberg.org/files/10625/10625-h/dict1.html .

[13] University of Michigan, “Middle English Dictionary”, http://quod.lib.umich.edu/m/med/ .